

「能楽資料展」《盛久》を中心に」 出展目録

二〇一一年十二月十八日（日）午前十一時～午後四時
於 神戸女子大学古典芸能研究センター 閲覧室

能《盛久》の道行は曲舞「海道下」を利用しており、宴曲とも関わりが深い。この度、特別研究会「中世道行文形成過程の基礎的研究——宴曲「海道」を起点として——」開催にちなみ、能《盛久》を中心にセンター所蔵の資料を展示した。

謡本（写本）

1 堀池宗叱謡本 二番綴、中本、四十七冊

折本仕立てで両面に一番ずつ収める。折本の表裏がともに表紙となる、謡本には珍しい装幀。表紙には紺地に金銀泥で曲に因んだ景物や人物が描かれ、左肩に金銀泥草花絵入り朱題簽あるいは朱無地題簽が貼られる。題簽の文字は、前者が近衛龍山筆、後者が後奈良院皇子曼殊院覚恕親王筆との極めを有し、龍山の筆は慶長期（十年迄）のものとして認定される。九十四曲中二十三曲に、「堀池宗叱（花押）」の署名がある。

2 上掛り謡本 中本、二十四冊（零本含む）

紺色無地表紙に曲ごとに異なる金銀泥表紙画があり、中央上の縦長朱色題箋に曲名墨書。綴葉装、本文六行。慶長頃の書写か。

3 上掛り二番綴謡本 中本、四十八冊

綴葉装。表紙は紺色と白色との二種で、左肩に縦長金泥絵入の替題箋を付す。各冊二曲目のみ内題あり。室町末期頃の節付か。

4 室町末期写下掛り謡本 中本、五十冊

退紅色表紙、綴葉装。表紙には緑青色と金泥で草花、鳥、貝類など数種の絵が描かれるが、曲の内容には関連しない。「しほる」など下掛り特有の用語も見られる節付ながら、役名表記は「わき」のほか上掛り系の「シテ」という表記も見られる。

5 江戸初期写観世流謡本 半紙本、九十八冊

本文筆者（数筆か）、節付者ともに不明。施譜は観世大夫黒雪風で、しかるべき証本によるか。本文は基本的に上掛りの古版本の範囲で、かつ特定の一つに限らない。元和卯月本とは、題簽の文字が似ていたり、非所収曲に朱筆の書入れがあるなど、何らかの関わりのある可能性もうかがえるが、影響関係は未詳。

6 平松家旧蔵福王流番外謡曲八百十番本 半紙本、六十七冊

四百番・五百番は五番綴、六百番以降は十番綴。本来は八百番までの計七十冊と、新曲十番の一冊で八百十番の揃いであつたらしい(五冊欠)。四百番本は山藍摺蜀江錦艶出表紙、五百番本は青白椽布目表紙、六百番、七百番本は紺色流水寿文空押表紙、八百番本は黄椽布目表紙。ほかに「板外外題揃 八百十番」紺表紙一冊。奥付に「当家伝りの写本有之トいへ共 天明八戊申年京宇土火災之節散乱 抛之今般改令書写者也 文政十一年子九月 平松善右衛門 行年六十五歳 信尚(花押)」とある。

7 江戸期写上掛り五百番謡本 五番綴、半紙本、百冊

長浜の旧家、吉田家に、同装の「謡目録」一冊・「謡名寄」上下二冊と揃いで伝来。本文は、法政大学能楽研究所蔵の『福王流五百番謡本』と同系。本文・節ともに観世流とほぼ同じ。

謡本(版本)

8 寛永十年刊観世流謡本 五番綴、小本、二十冊

浅黄色表紙、中央横型色替刷題簽。異書体で片面六行、直し間拍子なしという古風な版式。奥付には「右百番謡本観世左近大夫章句以有之令開板者也」とあるが、観世流とは断定し難い。本書所収曲は他に類例の無い編成で、一般には収録されない番外謡をも含む。早稲田大学演劇博物館安田文庫には、本書と同版の無刊記本(特製本)があるが、冊毎の編成は本書と全く異なり、百番全体でも相互に二十六曲の出入りが認められる。

9 元和元年西森六兵衛政春・吉田徳兵衛満正刊下掛り謡本

五番綴、半紙本、二十冊

刊者兩人の名から通称「六徳本」。江戸期下掛り謡本の中でも特異な位置を占める本で、明治四十年に刊行された金春流謡本の元となった。本文は、下掛り最古の版本の車屋本系統ではなく、金春大夫の系統の詞章。本文書体は、観世流謡本に似せて近衛流、間拍子はヤヲハ・ヤア式のほかに「内ノ拍子・内ヤヲハ・内ヤヲ・内ヤア」をも用い、強吟と弱吟の別を「弓・禾」の略号で示すなど、節付を詳細にしている。

10 刊年不明木田七兵衛刊進藤流謡本 五番綴、中本、二十冊

奥付に「右百番之謡本者 進藤久右衛門尉以章句 正本写之者也 木田七兵衛開板 押小路通竹屋町有之」とある。寛永期の刊行か。間拍子なし。表紙左肩に横長書題簽、地小口に漢字一字で曲名を朱書する。独自の組合せを持つ新出本。

11 万治元年林和泉掾刊仕舞付百番 五番綴、大本、十一冊(九冊欠)

原装では五番の曲名を列記した横型題簽のほかに「仕舞付百番 七太夫流」なる長形外題が表紙にあり、通称「七太夫仕舞付」。本文は擬車屋本系で、刊年・刊者を明記した最初の下掛り板行謡本。間拍子、囃子付、型付、作り物、間狂言等をも記している点が注目される。

12 万治二年山本長兵衛刊頭注入謡本

五番綴、大本、十九冊(一冊欠)

紺無地表紙。紙面一杯に輪郭をとり、上部二寸ほどの欄に字句の注釈を施し、下部に御家流の本文を掲げる新形式の謡本。頭注入りも本文八行という構成も、以後に例がない。本書は山長が初めて刊行した謡本。以後、江戸末期に現在の檜書店に版權を譲るまで、山長は観世流謡本刊行の中心的役割を担った。

13 寛文十年恵賢刊観世流謡本 五番綴、大本、十九冊（第一冊欠）

寛文十年恵賢版の初刷。各巻末に服部宗碩の署名と「流水軒盛信」の朱印あり。服部宗碩（隠居名）こと福王盛信の手沢本。本文九行。全十九冊のうち、題簽付き十二冊。表紙は香色で下段に花紋亀甲空押、萌黄地金草花模様切箔散好題簽に曲名墨書。題簽も宗碩自筆か。本文も朱筆で章句語句の訂正挿入を施す。

15 14 明和二年出雲寺和泉掾刊観世流謡本（明和改正謡本） 外組
同 独吟

大本、外組五番綴二十冊・独吟之巻八冊（目録一冊を含む）

十五世観世大夫元章による改訂謡本。内・外二百番、習十番（以上、紺色菊牡丹唐草模様表紙）、二百十番謡目録、九祝舞（以上紺色文様入七宝繫表紙）各一冊、独吟（九冊・紺色分銅繫ぎに宝尽くし表紙）がその全容。全二百十番の曲目は復活させた古曲を含む独特の選定で、ほとんどの曲の文句を改訂、節付法を工夫して詳細な直しを加え、発音通りの振り仮名を施すなど、国学全盛の風潮をも反映している。この大胆な改訂は総じて不評で、元章没後すぐに廃止されたため、わずか九年足らずの実施で終わった。内組・外組は、特製本らしい朱色表紙の一番綴本なども含め数々の装幀で刊行されたが、総じて美麗で、本書

は中程度の上製本と思われる。

16 文化七年刊 舞囃謡附仕舞謡 大本、五冊

第一冊〜第四冊が「舞囃謡」、第五冊のみ「仕舞謡」で、五冊一揃の本。第五冊巻末に「右宝生流舞囃謡百拾四番仕舞謡式拾九番使大夫将監英勝章句之者今上梓以為府藏文化七年六月」とあり、刊者名はないが、宝生大夫を後援した一橋徳川家の私家版。セクター蔵本は、展示した退紅色金砂子五雲模様布目表紙（金銀刷毛目題箋）のもの（橘文庫）と、水浅黄表紙（伊藤正義文庫）との二種で、特製本と並製本と見られるが、『鴻山文庫本の研究』に記す装幀とは異なる別装本。刊行部数自体は多くないが、かなり多様な表装を施されたことが窺える。

17 その他
謡抄 刊本、大本、十冊、

豊臣秀次の命によって文禄四年に編纂の始まった、最古の注釈書。古活字本が各種ある。本書は、最初に刊行された（慶長頃）の古活字版守清本で、早稲田大学演劇博物館安田文庫本・法政大学能楽研究所本・鴻山文庫本などと同系。

18 謡曲参考鈔 写本、大本、二十一冊（別録一冊を含む）

縹色表紙。延岡内藤家臣佐久間信満（露傘）による謡曲百番の注釈書。立圓の注を「圓注云」のかたちで引用し、自注を「傘考」として付す。天明六年清水荒爾序。高嶋貞勝跋。

20 19 檜書店旧蔵謡本版本 観世流「盛久」第三丁・第四丁、
同 金剛流「盛久」第一丁・第二丁

平成十三年に謡本専門書店である檜書店から寄贈された約三千四百枚の版木のうちの二枚で、明治期刊の謡本に使用された。

21 謡歌留多 二百枚・百曲

曲名と梗概を書いた札の裏面にその曲の一部が無章句で書かれており、これに対応する札の表面には曲名だけ、その裏面にはもう一枚と同じ箇所 of 謡の文句が書かれている。謡の習得度によって幾通りかの遊び方が可能である。

〔参考展示〕小謡本各種

堀池宗叱

宗叱は、堀池宗活の父、堀池次介忠清。永禄から文禄期に活躍した京都の手猿楽者(素人の能役者)で、茶道も堪能であった。宗叱は還暦出家後の法名らしく、天正九年が初見。

福王流

福王流は、江戸時代は進藤流とともに観世座付だったワキ方。九代目観世大夫黒雪の弟、服部栖元の子が、中絶していた福王家を再興し、五世茂兵衛盛親となった。盛親は晩年京都に隠居して服部宗巴と称し素謡を指南した。いわゆる京観世である。福王は多数の謡を伝えて、俗に福王八百番という。

平松善右衛門

平松善右衛門は、『福氏門人録』にも名前の見える享保以来の福王家門人で、同門の平岡八郎右衛門とともに、素人ながら十一世茂十郎盛充当時の福王流を支えた存在であった。

平岡家は、十世盛世時代の寛政元年には、当代の八郎右衛門直敬が一代に限り福王の苗字を名乗ることを許されたほどの実力者で、この家もまた、平松家と同様の八百番本を蔵していた(吉田幸一氏旧蔵「八百番謡本」、現関西大学蔵)。

進藤流

進藤流は、観世座付きのワキ方で、寛永十二年に八十三歳で没した進藤久右衛門忠次を流祖とする。進藤流の謡本は、江戸初期には観世流に次いで数多く刊行された。進藤流謡本相互の間には目立つ相違がなく、最初の木田本の詞章がほぼ踏襲されたらしい。

福王盛信(服部宗碩)

福王盛信(一六六〇〜一七二一)は、五代盛親宗巴の子で、幼名新之助。父宗巴が延宝元年に没する以前に養子盛仍(同腹の兄)に六代を継がせたが、盛仍が多病で延宝八年に没したため、二十一歳の時に七代を継いだ。元禄十六年正月二十二日に素謡の会を東山双林寺に行うなど盛んに活動した。宝永七年入道して宗碩を名乗る。正徳五年(五十六歳)、仙洞御所に召されて関寺小町の素謡を歌った。享保六年没、六十二歳。

*〔参考〕『二〇〇八年度能楽フォーラム「謡と謡本」 関連展示解題』